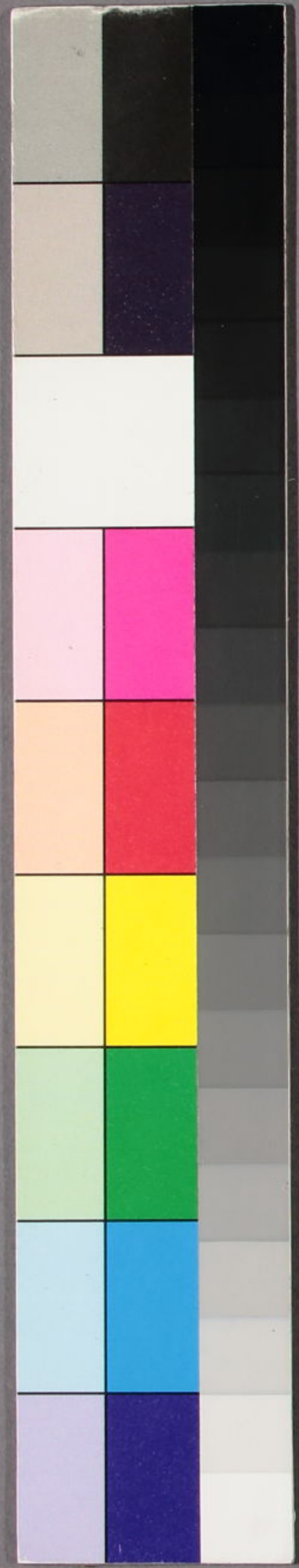


昭和九年三月七日 上天東庵

洗心院 七日の日  
結字の巻

王蓮園字委の蓮撰



春季乱(結)光

青き踏を周りにくえり無砂哉

瓢

眼の玉の四つえりや猫の姿

春

畑打や鉄えり合ふ三日月

九九

有明のえりきり添ふ様

玉浪

色紙田子鉄えりけり女便

苔雨

鉄

柳のたの西守の鉄瓶をきり

た

林の茶屋鉄瓶の湯のみきり

茶

波音や朝の霞の鉄砲洲

洲

鉄道の用通車や柳の里

里

鉄の射抜る方や小弓引

引

形

鉄形の塊を散るや山裾

裾

君雨子濡れて床らぬ人形師

師

旅笠も形つくるや春の山

山

畑打や身形かまぬ村お可

可

形は櫃らもはよませる柳の

柳

油

油菜の花見るとありほまじ畑

毒

油敷こ子とむらぶちお折草

毒

油敷こぶりけり雪解道

梨

夜桜や油坊主の海邊り

毒

根吹く鳥かきまの油坊主

毒

菜

子餅入菜取川新水

梨

根の菜の雲脂とる人や春の椽

玉浪

白酒に菜はあくともふ

九九

菜を採りて煮て先や梅葉下

苦酒

加減して食少や雑菜の終入菜

毒

卷

水鏡の栞巻に風光々々

剌

糸巻と一りの伊豆の風

玉浪

引張の栞巻とや蝶の庭

九九

栞巻の髪に柳のかすみ

甘雨

初風名や伊豆の松花粧

初春

玉

花吹雪宝珠の玉にかりけり

玉浪

玉垢不流きまのあや白猪

甘雨

水邊の川田にお玉杓子

春暮

玉顔不笑いかげのり舞の玉

剌

雪や玉と舞かすおの籠

九九

布

布晒す妹が裳裾の春の風

刺

布引の流道すまの駒鳥のおり

赤妻

花持のま布施持を老の納岸へ

九九

花の山赤い毛布を振りかへり

書由

梅尋ねし調布をひきたけり

玉浪

少

風少あつて柳の揺れにやり

玉浪

晴程は梅の少き名所ある

草ふ

少つたけを解らぬ菊の苗

草妻

最雪は残り少し山の腰

刺

少くてもふあたまは如月野

九九

所

枝か場所に馴と居る花の山 丸

飛々に水たき音の踏む所 刻

春の生々仲嘘と事勢散成 巻

我が春の居る味と所住の所 玉浪

所々梅所々柳 火 葛

忙中有閑

玉臺五老人



是中秀逸

椿

此後...

候

鳴ら来たり

油

書



加減

森表

念々や雑煮の

総入れ歯

水漫

森表

門田相玉

拘子かき

赤い毛布を

花北山

赤い毛布を

杭着る

苔雨

赤い毛布を

歯を沈め

苔雨

枯々窓先也

梅着る

2/4

落卷  
苦  
雨  
名